

聖書：創世記 18：16～33

説教題：その十人のゆえに

日時：2023年9月10日（朝拝）

前回の 18 章前半で主がアブラハムのところに来られました。アブラハムは知らずして 3 人の旅人を迎え入れ、もてなしましたが、それは何と主でした。その主との交わりを通してアブラハムは二つの御心を教えられることとなりました。一つはサラがいよいよ来年、約束の子を産むことについてです。サラはこれを聞いて笑ってしまいましたが、彼女はこの出来事を通して不信仰を悔い改め、全能の主を信じて約束の祝福にあずかる者へと導かれました。

主がアブラハムのところに来て分かち合われたもう一つのことを今日の箇所に記載されています。16 節に 3 人は立ち上がって、ソドムの方を見下ろし、アブラハムは彼らを見送るために一緒に行ったとあります。その時、主がこのように考えられたと 17 節に記載されます。「主はこう考えられた。『わたしは、自分がしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。』」主はこうしてご自身の心にあることをアブラハムに分かち合おうとされます。アブラハムは「神の友」と呼ばれたとイザヤ書 41 章 8 節、歴代誌第二 20 章 7 節、ヤコブの手紙 2 章 23 節にあります。「友」というのは親しい関係にある人のことです。その友には他の人には見せない心の内や自分の考えを分かち合ったりします。つまり聖なる神がアブラハムをそのような者と考えてくださったのです。主はご自身が考えていることを黙ってただ一人で行うのではなく、アブラハムを友として、彼にこれからしようとしていることを隠しておくべきだろうか、いやそうではない！と言って、その御心をここで分かち合おうとされたのです。

18 節に「アブラハムは必ず、強く大いなる国民となり、地のすべての国民は彼によって祝福される」とあります。これは創世記 12 章 2～3 節のアブラハムの召命の時に言われていた言葉です。主はアブラハムを通して地のすべての民族は祝福されると言っておられました。ですから主はこれからご自分がなさろうとすることを彼と関係なく行おうとはされなかったのです。主は彼を巻き込み、一緒にこのことについて考えて、このわざに当たろうとされたのです。

19 節にはアブラハムの選びの目的が語られています。そこに「わたしがアブラハム

を選び出したのは」とあります。選びは神の恵みによります。偶像礼拝をする家系にあったアブラハムを神は恵みによって選んでくださいました。その選びには目的があるということがここに言われています。それは「彼がその子どもたちと後の家族に命じて、彼らが主の道を守り、正義と公正を行うようになるため」ということです。つまり主の御心を知って主の道を守り、主を映し出すような生活をする者たちとなるということです。そのような歩みを経て主が約束したことはアブラハムと彼の子孫に成就すると言われていています。言い換えるなら神の祝福に最終的にあずかるためには聖化の歩みが必要であるということです。恵みによって選ばればそれで終わりではありません。主はどのように考え、行動されるお方なのか、主の御心を学び、その主を映し出すような歩みをする者たちへと変えられて行かなければなりません。そのような道を通してこそ主の約束は真に彼と彼の子孫の上に成就するのです。

そのためには責任があるということも言われています。それはアブラハムが、その子どもたちと後の家族に命じること、教えることです。主が与えてくださる分かち合いを受けて、主の御心にかなう生活について子どもたちに勧め、命じることです。そうして後に続く者たちが主の道を知り、主を映し出す歩みをする者たちとなることです。ですから私たちも主がここでアブラハムに分かち合われた内容を学ぶことを通して、主はどんな方かを学び、主と同じ道を行く者、主を反映する歩みをする者たちとなって行かなければなりません。またご自身の考えを分かち合おうとされる主のお姿が最も明快に現れているものと言えましょうか。それは聖書ですね。神は聖書においてご自身の考え、御心を私たちに分かるようにはっきり示しておられます。なぜそのようにされたのでしょうか。それはここで言われている通り、私たちが「主の道を守り、正義と公正を行うようになるため」です。ですから神が私たちに友とし、御心を分かち合ってくださいすることは特権ですが、そこで止まってしまっはなりません。神がこのように分かち合ってくださいことを感謝して、私たちは御心にかなう歩みをする事へと益々進む者でなければなりません。そうした取り組みの上に主の救いは最終的に私たちの上に成就することとなるのです。

そこで主はご自身がしようとしておられることをここでアブラハムに明らかにされます。20 節：「主は言われた。『ソドムとゴモラの叫びは非常に大きく、彼らの罪はきわめて重い。』」 この叫びとはソドムとゴモラでなされている悪に関してさばきを求める叫びなのでしょう。それともそこで行われている罪そのものが大声を上げて

いるという意味なのでしょうか。21 節で主は「わたしは下って行って、わたしに届いた叫びどおり、彼らが滅ぼし尽くされるべきかどうかを、見て確かめたい」と言われます。神はもちろん全知全能であり、すべてをご存知です。しかしここにさばきを下さるにあたって慎重であられる神の姿が描かれています。急いですぐにさばきを下さず、徹底的に調べ、証拠を確かめた上で、事を行われる。その目的の下にソドムの町に赴こうとしているご自分であることを主はアブラハムに分かち合われました。さてこれを聞いてアブラハムはどのように応答したのでしょうか。

22 節に「その人たちは、そこからソドムの方へ進んで行った」とあります。しかし同じ節に「アブラハムは、まだ主の前に立っていた」とも記されます。次章の 1 節から分かる通り、ソドムへと進んで行ったのは二人の御使いです。ですから残りの一人がアブラハムとともにここにいたと考えられます。それは主であると言われていまずから、その方は主ご自身であったと見ることができます。あるいは 3 人とも御使いです。その内の一人が特別に主を代表しており、その彼を通して主がアブラハムとここで語り合われたと見ることもできます。

さてアブラハムはどう応答したのでしょうか。彼がここでしたことはソドムのための執り成しでした。まず彼はこう言います。23～25 節：「アブラハムは近づいて言った。『あなたは本当に、正しい者を悪い者とともに滅ぼし尽くされるのですか。もしかすると、その町の中に正しい者が五十人いるかもしれません。あなたは本当に彼らを滅ぼし尽くされるのですか。その中にいる五十人の正しい者のために、その町をお赦しにならないのですか。正しい者を悪い者とともに殺し、そのため正しい者と悪い者が同じようになる、というようなことを、あなたがなさることは絶対にありません。そんなことは絶対にあり得ないことです。全地をさばくお方は、公正を行うべきではありませんか。』」彼のとりなしの祈りに見られる第一の特徴は神のご性質に基づく祈りであるということです。正しい者と悪い者が一緒に滅ぼされるというようなことをあなたがなさることは絶対にない！と彼は言います。全地をさばく神のさばきは公正でなければならないはずではありませんかと。また彼は単に正しさだけを求めたものではありません。もしそうであるなら、正しい人たちだけを救ってくださるようにと祈っても良かったはずですが。しかし彼は正しい者が 50 人いたら、彼らだけではなく、その町全体を赦してくださるようにと祈っています。つまりこれは神の憐みを求めている祈りです。アブラハムは甥のロトがこの町に住んでいることを思っていたでしょ

う。しかし彼はロトの救いだけを願ったのではなく、ソドムの町全体の救いを願っています。ソドムと言えば、14章で見たように、アブラハムをひどく扱った町でした。外国の侵略から救ってあげたのに感謝もせず、凶々しい態度で応答して来た町です。しかしそんな町のために救いを願うアブラハムの姿がここに 있습니다。後のイエス様の「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」という教えをすでに実践しているアブラハムです。まさに神を深く知っている「神の友」としてのアブラハムの姿がここに見られます。

また彼の祈りの特徴の二つ目は大胆に主に近づきつつも、非常な謙遜がそこに見られることです。「全地をさばくお方は、公正を行うべきではありませんか」という彼の言葉を読むと、まるで神に向かって説教しているような態度に見えるかもしれませんが、彼は27節で「ご覧ください。私はちりや灰にすぎませんが、・・・」と言っています。30節では「わが主よ。どうかお怒りにならないで・・・」と言っています。彼は自分が神の御前に小さな者、いつさばかれてもおかしくない者と捕らえています。主の前にへりくだり、ただ神の憐みにすがって嘆願している彼なのです。

そして何と言ってもこの祈りの特徴は粘り強い祈りであるということではないでしょうか。彼は最初、50人の正しい者がこの町にいれば、町全体を赦してくださらないでしょうかと願いました。しかしそこでやめずに、28節では「もしかすると、五十人の正しい者に五人不足しているかもしれません。その五人のために、あなたは町のすべてを滅ぼされるのでしょうか。」と問います。これに対して「いや、滅ぼしはしない」という主のお答えを聞くと、「もしかすると、そこに見つかるのは40人かもしれません」と問いかけます。さらには30人ではどうでしょうか、20人ではどうでしょうか、ついには10人ではどうでしょうかと問います。皆さんならどこまで言えるでしょうか。最初の「正しい者が50人いるなら」という祈りを祈るだけでも難しいことですが、それを45人に、さらには40人に、そして30人にと願うところまでで精一杯ではないでしょうか。ところがアブラハムは50人から始めて何と10人まで話を持って行きました！身の危険を感じつつも、よくもそこまで粘って主と語り合ったものだと思いませんか。そして同時に注目すべきことは主もアブラハムの祈りを進んで受け入れておられるということです。主は渋々応答してはいません。アブラハムの祈りに文句を言ってはいません。ですから主はアブラハムに押し切られたわけではないのです。むしろここに見るのは主とアブラハムは同じ心であった

ということではないでしょうか。アブラハムは主なる神を知る者として主の御心になう祈りを捧げました。主はそれを一つ一つ喜んで受け入れ、「そうしよう」「あなたが言う通り、滅ぼしはしない」と言われました。つまり主とアブラハムの両方がソドムの救いを心にかけて互いに語り合ったというのがこの 18 章後半であったのではないのでしょうか。

このアブラハムのとりなしの祈りの記事を読む時、思い起こされる聖書の他の箇所はどこでしょうか。この後、アブラハムに倣う色々なとりなしの祈りの実例が見られると思いますが、その代表はアブラハムのまことの子孫イエス・キリストの執り成しではないのでしょうか。特にヨハネの福音書 17 章には十字架前夜のイエス様の祈り、大祭司としての祈りが記されています。アブラハムはあの主のお姿を先取りするような祈りをここでささげていると見ることができます。もちろんイエス様の祈りは特別なものです。約束の救い主としてイエス様はご自身の尊い命という犠牲をささげ、そのご自身の功績に基づいてとりなしてくださいました。そして今日も天で私たちのためにとりなしてくださいています。私たちはそのとりなしに感謝してあずかりつつ、私たちが主と結ばれている者たちとして、またアブラハムの子孫として、アブラハムの模範に倣い、他者のためにとりなしをするように、他の人の救いのために祈るようにと導かれています。イエス様はヨハネの福音書 15 章 15 節でこう言われました。「わたしはもう、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべなら主人が何をするのか知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。父から聞いたことをすべて、あなたがたには知らせたからです。」 私たちは神の御心、神のお考えを親しく知らされています。聖書を通して神はご自身の御心について私たちに親しく分かち合ってくださいています。私たちはその御心を分かち合っている者たちとして、その神の御心に沿ったことを自分の願いとし、祈りとしているのでしょうか。ご自身を私たちに親しく分かち合ってくださいている神にふさわしい応答を御前にささげているのでしょうか。

ソドムとゴモラは次の章でさばかれます。ソドムの時はそこで尽きました。その出来事はやがての最後のさばきの前兆としての意味を持っています。しかしこの世界の最後の時はまだ来ていません。私たちはアブラハムの子孫として、私たちの友人のため、家族のため、救い主キリストの功績により頼んで、アブラハムのように執り成す者でありたいと思います。見込みがあると思われる人たちのためだけでなく、ソドム

のようにそうではないと思われる人たちのためにも祈りたいと思います。そこに神の御心を分かち合っている者らしい特性を発揮し、神のご計画がさらに前進し、実現するために仕え、用いられる民の歩みを導かれないしたいと思います。